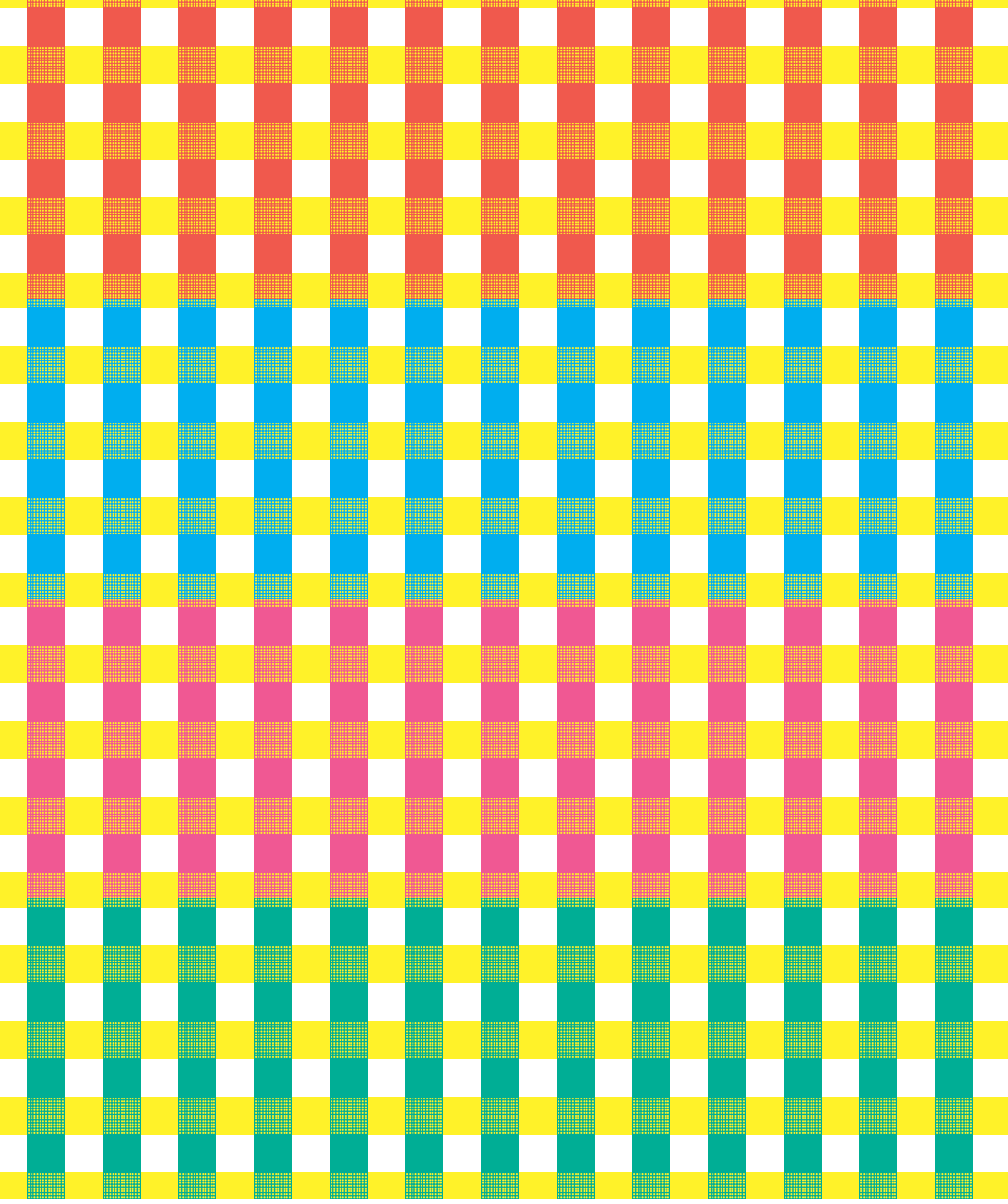
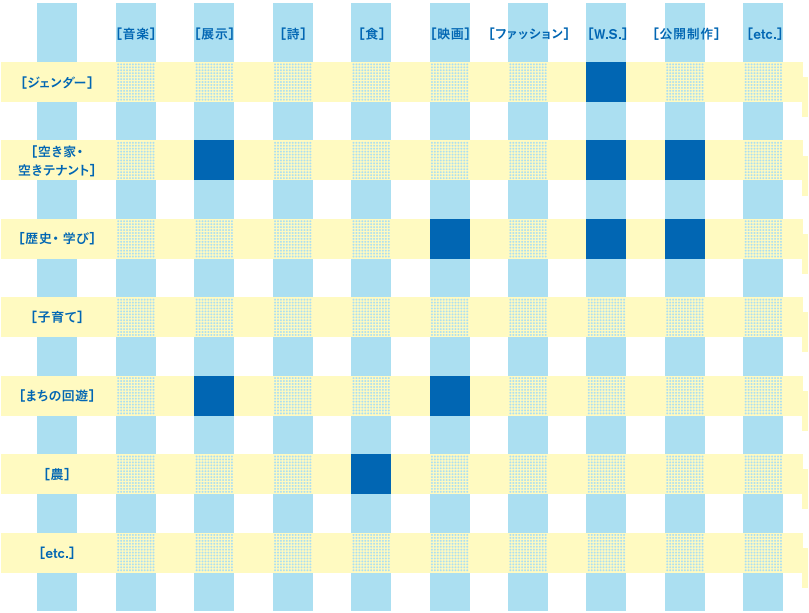


ACKT

まちを舞台に編まれる芸術と文化

【ACKT（アクト／アートセンタークニタチ）について】

ACKTはまちなかで生まれる多様なプログラムを通して、アーティストや市民・市外の参加者と交流をしながら活動し、共に成長していくためのアートプロジェクトです。
「まちを舞台に編まれる芸術と文化」をテーマにしたプログラムやアクションを通じて、新たなまちの価値を生み出していきます。



【活動について】

ACKTはひとつのプログラムだけを進めるのではなく、上記の図にあるような社会課題と、様々なアートの分野が交わる、［芸術と文化／スペースと人］の交差点をつくりだします。
一人ひとりが自分の価値観や意思を持ちながら、「だれもが芸術家である」というダイバーシティを目指しています。

【運営】

「国立市文化芸術推進基本計画」が目指す“文化と芸術が香るまちくにたち”の実現に向け、以下の団体が運営しています。
［主催］東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、
国立市、公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団、
一般社団法人ACKT

2022年度のプログラム

遊○地
-YUENCHI-

空き家や空き地や緑地など、活用されていないスペースを見つけ、新しい使い方をすることで、これまでにはなかった光景や交流を生み出すためのプログラム。ここでは、まちなかで新しい動きをつくる人と参加する人はみなCASTであり、その「かかわりしろ」を増やすのが遊○地の役目。大人も子どもも、若者も高齢者も、男性も女性もLGBTQも、健常者も障害者も、誰もがCASTになれる。CASTが集まり、遊○地は動きはじめます。

○ZINE
-エンジン-

○ZINEは、このまちのアクション（活動）を紙面の中で浮かび上がらせるプログラム。まちに住む人に情報を発信し、また収集することで、これまでになかった縁がつながり、これからの活動のきっかけをつくるエンジンとなるフリーペーパーです。今後定期的に、市内の様々な場所で配布していきます。ぜひお手にとってご覧ください!

・と
-TENTO-

屋外や廃屋、高架下や駐車場や屋上、暗い場所や小さい場所…。普段なら見逃してしまうようなまちの隙間にランドマークとなるテントを仮設し、アクションをインストールしていくプログラム。プライベートでもなくオフィスでもない、そんな街の縁側のような中間領域を点在させて、まちの人たちと交流をしながら、その意識や認識、そしてまちの仕組みを変えていきます。

谷保村◉式▲土■器
YABOMURA DOKI

国立市南部に広がる谷保エリア。古くから栄えたこのエリアでは縄文時代から人が定住し、今も田んぼや畑、豊かな湧水など、市内北部では見られない恵まれた自然が残るエリアです。「谷保村式土器」は、そんな縄文時代の象徴とも言える〈土器〉をテーマとしたプログラム。普段は南部に来たことのない方や市内外の人も含めて、縄文時代の歴史を手で学びながら、2日間をかけて自分だけの土器を制作します。

遊◯地 レポート

2022年3月19日[土]、20日[日]の2日間にわたり開催した「URBANING_U ONLINE」は、ACKTが取り組む「遊◯地」の一環としてJR中央線の国立駅・立川駅間に広がる高架下空間で実施しました。

ACKTの活動地である東京都国立市では、空き家や空き店舗、活用されていない畑、住宅街の一角にある公園、あまり使われていない公共空間などが点在しています。「遊◯地」は、そのようなまちの中で当たり前になった風景、使われていない場所などをまちの余白(◯)と見立て、本来とは全く異なるアプローチで使うことで、これまでになかった新しい光景や交流を生み出すきっかけをつくる取り組みです。

この場所で最初の「遊◯地」をはじめるにあたり、声掛けをしたアーティストが、宮口明子、笠置秀紀のユニット、mi-ri meter(ミリメーター)。日常を丹念に観察し、空間と社会の様々な規範を解きほぐしながら、一人ひとりが都市に関われる「視点」や「空間」を提示する活動をしています。

今回のプログラムとしてmi-ri meterから提示されたのが「URBANING_U 都市の学校」でした。「制度や慣習によって絡みあった社会的枠組みを解きほぐし、自らの空間を取り戻す。わたしと都市の距離を縮める試み。」として、過去に数度、東京や大阪の都市で実施されたもの。mi-ri meterからの指示に沿ってまちを巡り、mi-ri meterと対話をしていく中で、参加者自身がまちとの関係性を見つめ直すプログラムです。これは私たちが国立のまちの異なる側面に気づくきっかけにもなると期待されました。

冒頭に「URBANING_U ONLINE」と述べた通り、オンラインを介した企画としたのが今回の大きな特徴です。コロナ禍という現状を加味し、今だからこそできることを積極的に試みるため、あえてオンラインを通じて全国で同時参加できるプログラムに変更したものです。国立市での参加+全国参加として2週間程度の公募をかけたところ、国立市だけでなく、札幌や新宿、神戸、大分など、全国各地から8名の参加が決定。参加者には事前にmi-ri meterからインビテーションとして、“WORK”の指示書やワークカード、リアルタイムで一人称視点の映像をオンラインに繋ぐためのスマートフォンを同梱した「URBANING_U KIT」を送付しました。

「URBANING_U ONLINE」は2日間のプログラムで構成。DAY1は「エクササイズプログラム」。参加者がZoomミーティングを介したmi-ri meterからの指示にしたがってまちを巡り(WORKし)、そこで感じたことを報告・意見交換しました。DAY2は、DAY1のWORKを参加者と共に振り返る「レビュートーク」と、mi-ri meterとACKTが「国立」「アート」などをテーマにこれからを展望する

「オープンミーティング」を実施しました。

DAY1当日、参加者は「URBANING_U KIT」を手に、それぞれの自宅またはオフィスなどを拠点として、常時Zoomミーティングに参加しながら、mi-ri meterからの指示のもと、拠点やまちなかでのワークを実施しました。以下がWORKとして出された指示の一覧です。

WORK1 | 普段登らない場所に登りなさい。
　　普段通らない場所を通りなさい。
WORK2 | あなたの定点を探しなさい。
WORK3 | その定点を掃除しなさい。
WORK4 | 普段使っているものを定点にそっと置きなさい。
WORK5 | そこに種を植えなさい。

プログラムでは、WORKごとに拠点を出発し、まちの中で指示を実行し、拠点に戻ります。その間は基本的にまちと対峙する「わたし」の時間です。雪が積もり、歩道に変化が生まれている札幌、雑居ビルが林立する新宿、繁華街が広がる神戸、周囲を木々に囲まれた大分の集落。各人の体験は、各々の記述と共に携帯端末などの動画によって共有・記録されるほか、国立市の高架下に仮設した「高架下臨時スタジオ」のスクリーンに映し出され、同じ指示のもと、異なる環境下で、同時にスタジオにいるmi-ri meterと対話しながらWORKが続いていきました。

例えば、新宿の雑居ビルを登る時、非常階段を一段ずつあがる不安感は、周囲の建物よりも高い5階以上になると、自然と消えていった。木の上に登ろうとしたら、体が重くて難しかった。花壇の上に登ったり、橋の欄干に掴まって歩いたり、普段と違う行動をとることは、周囲の視線が非常に気になる行為だと気付いた。定点とした場所を掃除したら愛着が生まれた。指示に従ってWORKを行うことで、普段は意識していない、まちと自身の関係性が浮き彫りになっていきました。

多くの参加者が感じたのは、子どもの頃と現在の、まちの捉え方の違いです。大人は自分の習慣が身についていたり、地図を使って行動を決めることができたり。目的を持った行動ができてしまうからこそ、自身の視界を無意識に狭めてしまっている。一方で子どもの頃は、気持ちの赴くままに歩くことができ、本能的に不気味に感じるからこの先は行かないでおこう、という感覚も持っていたというもの。他者の視線を無意識に感じてしまうことで、まちで自然と不自由さを受け入れていることにも気付かされます。

また、木の上に登る、狭い隙間に入り込んでいく……子どもや動物が当然に入り込める場所でも、大人が物理的に到達できない場所があります。それは翻って、まちが大人が生活しやすいように(障害を感じないように)デザインされているということを示しているのかもしれません。

DAY1での会話や、DAY2のレビュートークを通じて、参加者の共通項と、それぞれの視点の違いが露わになり、まちと対峙する様々な視点を獲得することができました。

mi-ri meterと(一般社団法人)ACKTのオープンミーティングの中で、整然とした国立市は、一見余白の少ないまちであるという話題が上がりました。しかし、国立市内で参加者が多くの余白や可能性をWORKの中から見出したことや、全国の参加者の視点からも、新たな価値が感じられました。

私たちが取り組みの名称を「遊◯地」としたように、まちの中でまだ見ぬ人も含め様々な人の「◯=かかわりしろ」をつくっていき、これまでとは全く違った視点でまちを見つめ直し、「アクトしていく」環境を今後も生み出していきたいと考えています。

レポートのロングver.を公開中!こちらをご覧ください。▼

[CAST]

VOL.01 加藤健介(合同会社三画舎・国立本店)

ACKTでは、まちなかで新しい動きを作る人やそこに参加する人を[CAST]と呼びます。そんなCASTの様々な活動をピックアップし紹介していきます。第1回目はACKTのメンバーでもある加藤健介さんが普段、どのような活動を行っているのか、まちづくりの仕事や国立本店のことを中心にお話を伺いました。

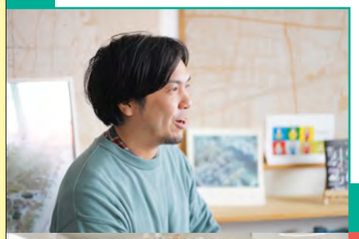
ACKTのメンバーでもある加藤健介さんは、国立市を拠点とし、地域に密着したまちづくりを行う「合同会社三画舎」や、本とまちをテーマにした「ほんとまち編集室」の室長として国立本店の運営を行っています。これまでの活動やまちづくりに対する思いなどを教えていただきました。

Q. 主な活動内容を教えてください。

三画舎では、まちづくりに関わる計画づくりやワークショップの企画運営、10分圏内の暮らしを大切にする求人メディア「国立人」の運営、国立市発行の「国立新書」の企画・編集・デザインなど、まちに関わる色々な業務を行っています。富士見通りでは“シェアするコンビニ”をテーマに、仲間と共に新たなプロジェクトを進めています。

Q. 国立で活動を始めたきっかけはありますか?

きっかけは国立本店です。9年前、知人に誘われてイベントに参加したことをきっかけに知り、仕事以外に自分が活動を行うコミュニティとしてちょうどいいと思い、メンバーになりました。当時は世田谷区に住んでいたのですが、様々なイベントやプロジェクトにかかわる中で、国立のまちや人に対して居心地の良さを感じるようになり、5年前に国立に引っ越してきました。



その頃から自分の住んでいるまちということもあり、国立での仕事が増えていったように思います。

Q. もともとまちづくりに興味があったのですか?

昔は自分の住んでるまちに全く興味がなかったんです。大学も、ものづくりができるようになりたいと思い建築学科に入りました。ですが、下北沢の再開発を端に開催された、国際学生ワークショップに大学4年時に参加したことや、所属していた研究室での沖縄合宿、岡山県高梁市での研究などをきっかけに、建物からまちへと興味の幅が少しずつ広がっていくことになりました。

Q. 最後に今後の活動について教えてください。

これからの20~30代が、この地域をベッドタウンとしてだけではなく、活躍できるまちとして当たり前に選んでくれるようにしていきたいです。難しいけど、都心でも地方でもなく、この地域を選ぶ人を増やしたい。そのために、自分自身も外の空気に触れ、知見を増やし、新しいチャレンジをしていくことが大切だと考えています。先の“シェアするコンビニ”や、真鶴駅前に借りた旧病院物件の活用もその一部です。ACKTの活動も。5年後、10年後に想像もつかないような変化が生まれていると嬉しいです。

インタビューのロングver.を公開中! こちらをご覧ください。▶

PROFILE

加藤健介(一般社団法人ACKT理事)|2018年9月に「合同会社三画舎」を設立。東京都国立市を拠点に、これまで地域で営まれてきた歴史・文化と、これから先の人の想いを大切にするまちづくりを実践中。求人サイト「国立人」の運営、国立市発行「国立新書」の編集、デザイン、連続講座「こくぶんじカレッジ」の企画運営など、まちに目を向けるきっかけづくりに力を入れている。国立本店「ほんとまち編集室」室長。

[LAND]

VOL.01 DAILY SUPPLY SSS

様々なまちを訪れ、気になる活動を行うスペースを紹介する[LAND]。1回目に訪れたのは、大田区池上にあるギャラリー兼日用品店の「DAILY SUPPLY SSS」です。店主として日々、カウンターに立つL PACK.のお二人にお話を伺いました。

DAILY SUPPLY SSS(以下、SSS)は、小田桐奨と中嶋哲矢によるユニット、L PACK.と建築家の敷浪一哉さんにより2017年の4月に横浜にある元日用品市場「八反橋フードセンター」の一角で始まった日用品店のプロジェクトです。2022年2月、同メンバーを中心にSANDO BY WEMON Projects(以下、SANDO)を行っていた大田区池上に店舗を移転しました。そんなSSSの活動について教えていただきました。

Q. SSSを始めたきっかけはなんですか?

中嶋:自分たちが住んでいた横浜でアトリエを探し始めたのがきっかけでした。もともとはカフェとアトリエを併設しようとしてたのですが、借りた建物が昔は日用品を扱う店だったことが面白いと思い、自分たちでも日用品店をやってみよう。ということで話が進んでいきました。

Q. ギャラリーも併設されていますが、あくまでお店というスタンスをとっているのはなぜですか?

中嶋:その方が目的が分かりやすいので。オルタナティブスペースなどと言われるよりもハードルが低くなるというか、誰でもアクセスしやすくなるのがいいなと思っています。

小田桐:コーヒー屋とか日用品店みたいな名前にすることでなるべく間口を広くしている。アートとか全く関係ない人でも入ってこれるドアをつくっている感じですね。

Q. SSSを始める上で意識したことはありますか?

小田桐:SSSに限らず、基本的には自分たちのつくりたいものをつくっているんだけど、SSSは日用品店なので、なるべく日用してもらいたいと思っています。コーヒーを買いに来る人、70円のドーナツを買いに来る人、雑貨を買いに来る人もいれば、作品を見に来る人もいる。そういう風にいくつかシーンを分けて色々な人が来やすいようにしています。

中嶋:最初の入り口はそれぞれ違う目的で来ていても、ドーナツを買いに来た人が作品を見ていたり、いつもコーヒーを買っていく人が代わりに作品を買って帰ることもあるんです。

Q. SSSは一言で表すとどんな場所ですか?

小田桐:SANDOのときは街の人との交流を意識してプロジェクトをやっていたんですが、SSSではもう一歩専門的なことを意識して活動していきたいと思っています。あくまで間口は狭めずに、もうちょっとだけ専門的なことを街に対して提供していく場所、という感じかな。

SANDO BY WEMON Projectsについてはこちらをご覧ください。▶

PROFILE

L PACK.|小田桐奨と中嶋哲矢によるユニット。共に1984年生まれ、静岡文化芸術大学空間造形学科卒。アート、デザイン、建築、民藝などの思考や技術を横断しながら、最小限の道具と現地の素材を臨機応変に組み合わせ、新しい風景をつくるプロジェクトや作品の発表を行う。近年の主なプロジェクトに、2019年–2022年「WEMON PROJECTS」(東京)、2017年~「DAILY SUPPLY SSS」(神奈川/東京)。

ACKT'S Member

MARUYAMA MASATAKA

プロジェクトディレクター／グラフィックデザイナー。株式会社と 代表取締役。国立市内に、地域の文化と本のあるお店『museum shop T』をオープン。また、2020年から千葉市美術館ミュージアムショップ『BATICA』の企画・運営も始める。「デザイナーとは職業ではなく生き方である」をモットーに、デザインを軸にしたその周りの仕事を進めている。ACKTでは代表理事を務める。長岡造形大学非常勤講師。

KATO KENSUKE

2018年 9月に「合同会社三画舎」を設立。国立市を拠点に、地域の歴史・文化と、これから先の人の想いを大切にするまちづくりを実践中。求人サイト「国立人」の運営、国立市発行「国立新書」の編集・デザイン、「こくぶんじカレッジ」の企画運営など、まちに目を向けるきっかけづくりに力を入れている。国立本店「ほんとまち編集室」室長。ACKTでは理事、広報担当。

ANDO RYO

1996年、新潟県生まれ。長岡造形大学視覚デザイン学科卒業。大学卒業後、グラフィックデザイナーとして広告制作に携わる。2022年、一般社団法人 ACKTに事務局スタッフとして参加。ACKTではレポート記事やフリーペーパー「◯ZINE」の制作、その他のデザインワークなども含めた事務局業務を担当。

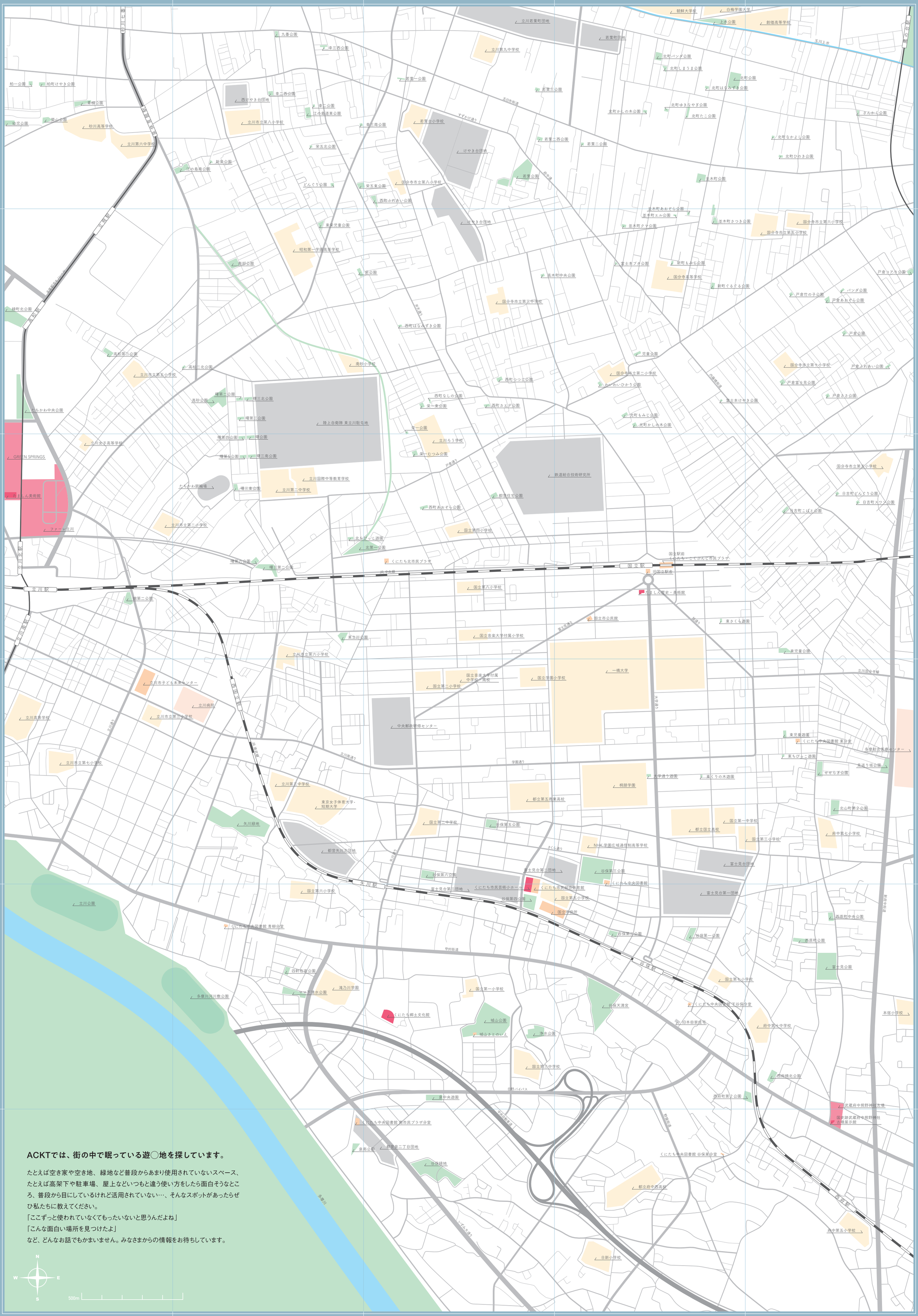
www.ackt.jp

editing & design: ACKT

［主催］東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、
国立市、公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団、一般社団法人ACKT
＊「ACKT（アクト／アートセンタークニタチ）」は東京アートポイント計画の一事業として運営しています。

ARTS COUNCIL TOKYO

【東京アートポイント計画について】
東京アートポイント計画は地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が展開している事業です。まちなかにある様々な地域資源を結ぶアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となるNPOを育成します。
https://www.artscouncil-tokyo.jp/



ACKTでは、街の中で眠っている遊◯地を探しています。

たとえば空き家や空き地、緑地など普段からあまり使用されていないスペース、たとえば高架下や駐車場、屋上などいつもと違う使い方をしたら面白そうなところ、普段から目にしているけれど活用されていない…、そんなスポットがあったらぜひ私たちに教えてください。

「ここずっと使われていなくてもったいないと思うんだよね」

「こんな面白い場所を見つけたよ」

など、どんなお話でもかまいません。みなさまからの情報をお待ちしています。

N
W E
S

500m